へることあるなり、さて或說に、昔の橘は今の蜜柑なり、今世に別に橘とてある物には非ずと云、又或說には、昔の橘即今も橘と云物なり、蜜柑は後に渡來つる物なるを、味の勝れる故に、世に多く弘まり、橘は劣れる故にけをされて、おのづから罕になれるなりと云り、此二ついづれよけむ定めがたし、今思ふに、今世に橘と云物は罕にありて、其實柑子よりはなほ小くて、味も蜜柑とは遙に劣れり、然るに古橘は、さばかり賞て、世に多かりし物なれば、是にはあらで、蜜柑こそ其なるべけれ、藥の橘皮にも、昔より蜜柑の皮を用るなり、今橘と云物の別にあるは、昔の橘をば、いつのほどよりか蜜柑とのみ云から、後に別なる一種な橘と名けたるならむ、其今橘と云物は、延喜式伊勢物語などに、小柑子と云る物是なるべしと思はる、然れば始の說宜しかるべきか、又思ふには、若昔の橘今の蜜柑のことならば、昔のまゝに今までも多知婆那とこそ云來るべきことなれ、蜜柑と云名に變るべき由なし、然れば蜜柑は後に渡來つる物なるが、其始て渡りたる時に、味の美きまゝに蜜柑とは呼初しならむかとも思はるれば、後の說も理ありて聞ゆ、又思ふに、美加牟と云名は、和名抄に擬假柚屬也、漢語抄云、柚柑とある、此柚柑を訛りて云るを、後に蜜柑とは書なせるかともおぼゆ、凡て橘柚柑柚の三は、漢國にてもまがひ、又其種類もいと多ければ、漢名に依ても決めがたく、又古今の異もいとまぎらはしきなり、又或說には、昔の橘は今云柑子なり、今云蜜柑は昔の柑子なりと云り、然れども柑子は今も柑子と云物とこそ聞えたれ、

〔日本書紀六垂仁〕九十年二月庚子朔、天皇命田道間守、遣常世國、令求非時香菓(トキシクノカクノミ)、香菓、此云箇俱能未、今謂橘是也、

〇又見古事記

〔本草和名十二木〕橘。柚。一名橘皮、甘皮、小冷、出陶景注、胡甘、柚酸者也、出蘇敬注、甘一名金實、一名平蹄、已上出兼名苑、橘一名金衣、一名黃、已上二名出兼名苑、

〔倭名類聚抄十六薑蒜〕橘。皮。本草注云、橘皮一名甘皮、和名太知波奈乃加波、一云木加波、

〔箋注倭名類聚抄四鹽梅〕新修本草木部上品云、橘柚一名橘皮、陶蘇注皆不載一名甘皮、但陶注云、以東橘爲好、西江亦有、而不如甘皮小冷療氣、本草倭名云、橘柚一名橘皮甘皮小冷出陶景注、源君以甘皮爲橘皮一名者、誤會本草和名、兼擧本條橘皮陶注甘皮也、證類本草引陶注、甘皮誤其皮、文義遂不可通、橘甘皮、柑子、俱見菓部、〇中略輔仁不載和名、按岐加波見廚事類記、蓋黃皮之義、

〔倭名類聚抄十七菓具〕甘。皮。本草云、橘皮一名甘皮、和名木加波、其色黃之義也、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏具〕原書木部上品云、橘柚一名橘皮、無甘皮之名、陶注云、以東橘爲好、西江亦